令和５年度第１回北海道立帯広美術館協議会議事録

１　日　　時　　令和５年（2023 年）８月８日（火）　13 時 30 分から１6 時 00 分

２　会　　場　　北海道立帯広美術館　講堂

３　出席委員　　加賀学（会長）、堂山貴也、笹島香織、松岡準志、持田誠、中村博明、若林洋
　　計７名（欠席　今木由香、水口誠、後藤眞美子、伊藤美也子、野祥子）

４　事 務 局　　野﨑弘幸（館長）、友田浩貴（副館長）、齊藤千鶴子（学芸課長）、吉田昌代（主査）

５　傍 聴 者　　なし

６　議　　事

館長挨拶、委員及び美術館職員紹介、展覧会鑑賞、会長及び副会長の選任の後、会長の進行により議事に入る。

（１）会長及び副会長の選任
（２）令和４年度事業の実施状況及び美術館評価について
（３）令和５年度事業の運営計画及び実施状況等について
（４）教育普及事業「オンラインアート教室」の取組状況
（５）協議・意見交換

７　協議・意見交換議事録

（１）会長、副会長の選任
事務局案を提示し、会長に加賀委員、副会長に水口委員を選任

（２）令和４年度事業の実施状況及び美術館評価について
（３）令和５年度事業の運営計画及び実施状況等について
（２）及び（３）について、事務局より説明及び委員からの質問に対し、事務局から回答

委　　員：今年度の計画における教育普及プログラムの実施予定件数は、昨年度の実績値より少ないが、参加者数については、数が増えるということか。

事 務 局：昨年度は、感染症対策による人数制限を行ったため、実施件数は多かったものの、参加者数は減少した。今後は、感染症対策としての人数制限は行わないため、過去５年間の平均値をもって、目標を設定している。

委　　員：過去５年間には、コロナ禍の時期も含むのか。

事 務 局：その時期も含めての平均値となる。

（４）教育普及事業「オンラインアート教室」の取組状況
事務局より説明及び委員からの質問に対し、事務局から回答

委　　員：本町でオンラインアート教室を実施したときに、学校の授業で開催できないか、教育委員会や校長会を通じて打診したが、年度当初ということもあり、学校の授業ではオンラ

インアート教室を行うことができなかった。今後、定着していけば、学校のカリキュラムの内での実施も広がっていくのではないのか。一方で、浦幌町や本別町の場合、美術館まで、車で片道１時間半くらいかかり、子どもたちが直接、美術を鑑賞する機会がかなり少ないので、こういった遠隔で親しむ機会があるのはいい。公民館の社会教育主事と話をして、むしろ、放課後の子どもの居場所づくりの一環として取り組めないかということになり、今回、公民館で開催することになった。難点は、当日にならないと、何人集まるかが分からないことである。事前に最大の人数で枠をとっていたが、実際には天候であるとか、農家が多いため、農作業の関係から帰宅時間がバラバラであることなどから、予定より少し少ない人数となった。開催後の公民館の職員との話では、本町では、ちょうど今のような夏休み中や冬休み中に子とどもたちの行く場所がなく、公民館や博物館で学童保育所や様々な教室を開設して、子どもの居場所づくり事業を行っているため、長期休業期間中に、このような事業を行うことができるといいのではないかという意見が出ていた。とてもいい経験をさせていただいたと公民館でも喜んでいたので、引き続き取組を拡大していただきたい。

委　　員：学校では、１年間のカリキュラムは２月から３月中には決まってしまうので、年度途中から新しい事業を取り入れるのは難しいと思うが、それとは別に休日等に行う社会教育事業での活用は十分に考えられる。学校のカリキュラムに取り入れるのであれば、少なくとも２月頃までに検討すれば、可能性があるのではないかと先ほどの発言を聞いて思った。

委　　員：私は教育関係とは全く無縁のところにいるが、今の動画を見て、オンラインアート教室は美術館の存在価値や意義がとても大きいのではないかと感じた。一般の立場からも、この事業をどんどん使っていただけるように、自分自身も周囲に漏らしてみたいと思った。

委　　員：今日拝見して、このオンラインアート教室は、非常に意義のあることだと感じた。私が赴任した学校の中でも、本当に近い帯広第五中学校にいたときは、美術の時間に子どもたちが美術館に来るようにして、全学級が一クラスずつここに来て鑑賞するということを行った。近い場合は徒歩で、少し離れている場合でも自転車で来れらる環境の学校はいいが、今現在、私がいる帯広第一中学校は遠い。そうするとオンラインでこのような授業ができることは、子どもたちにとって非常に有意義だと感じた。今回オンラインアート教室を利用している学校は特別支援学校が多いが、なにか特別支援学校からの要望があったのか。

事 務 局：先生同士の情報交換があるのかもしれないが、当館から特に特別支援学校に働きかけたといいうことではないので、結果的にそうなったと考える。

委　　員：帯広第一中学校も昨年度利用している。私も校長会でも紹介していきたい。本当にいい事業だと思った。

（５）協議・意見交換

最初に、事務局から欠席委員からの意見に対する事務局からの回答

委　　員：昨年度の評価調書において、評価が「Ｄ」と低かった美術情報提供の充実は、「ＡＲＳ、図書コーナーの利用者件数」の指標値が 6,492 人なのに対し、実績値が 89 人と達

成率が1.4%であったことが影響したと思うが、今年度の指標値が、開館日数×１件の228人となっており、昨年度と指標値の考え方が変わっているのかと思うが、そのことについて、説明してほしい。

事 務 局：令和３年度以前と実績のカウントの仕方を変更していることによる。図書コーナーの利用は個別に申し込みがある訳でないので、何を持って利用実績とするか様々な考え方がある。これまで当館では、図書コーナーに人が出入りしたことをもって利用者数としていたが、図書コーナーは、渡り廊下に設置されているため、利用者以外の通行者もカウントしていた。より、実態を把握するため、令和４年度からは、返却場所に返却された図書の数などから利用者数を推計する方法に改めた。そのため、令和４年度の目標値の前提となるカウント方法と実績値のカウントの方法が変わったため、数字が大きく異なってしまっている。また、現在の方法により集計された実績が令和４年度しかないため、令和５年度については、先ずは開館日数あたり１件を目標として設定した。

委　　員：カウントの仕方は他の道立美術館でも同様なのか、美術間毎に異なるのか。

事 務 局：当館独自に設定している。

委　　員：教育普及事業について、とても沢山実施していると興味深く見た。体験型も実施されていて、本日の展覧会でも後半に金属をたたくのがあり、高齢の女性と小学生ぐらいの女の子２人が非常によろこんでいた。私は、美術館の協議会に関わる前の感覚では、美術は見るだけという感覚だったが、美術、アートと戯れるというのは、これからは重要になると思うので、もっと、体験型というのを考えていくと道民性が上がるのではないか。また、今年の展覧会の名称で帯広美術館単独で考えられたものではないかもしれないが、「ポスターに乾杯！」というキャッチフレーズがあり、普段、美術から縁遠いところにいる人間のハートも擽られた。すぐ帰って、また乾杯がしたいと思った。

（５）協議・意見交換

委　　員：帯広美術館のホームページが新しくなって、結構時間が経っており、アクセス数も資料の報告では、ほぼ達成に近い形となっているが、今年の７月に國學院大學で開催された全国博物館学会において、慶應義塾大学の研究所が全国の博物館のホームページのサイト分析では、現在、パソコンからホームページを見る方は非常に少なくなってきていて、スマートフォンからSNSを経由してホームページに飛んでくる。しかもトップページから順に入ってくるという利用者は非常に少なく、キーワード検索でSNSで引っかかったものから、ダイレクトに個別のページに飛んでくる傾向が非常に増加している。そうしたことから考えると、資料の基本方針Ｃのソーシャルメディアの稼働数の達成率が少なめになっており、発信数が少し少ないことが、ホームページの伸び率の横ばいに通じているのではないかなという気がする。ホームページの実際の閲覧数というのは美術館独自にカウントしているのか、それともどこかに分析してもらっているのか。

事 務 局：当館のホームページは、道のホームページの一部であるため、道庁全体のホームページを所管しているところで、それぞれの閲覧数を集計している。

委　　員：美術館のどのページが、どこのサイトから検索されて閲覧されているのかという細かい情報は照会すると得られるものなのか。

事 務 局：承知している範囲ではそのような機能があるとは聞いたことがないが、そういったことが可能か、確認してみたい。

委　　員：折角ホームページが新しくなって見やすくなったので、より効果的に運用して行くためにも、そのホームページにたどり着いてもらわなければならないので、SNS などにより、より広い方に知っていただくということも、かなり効果的ではないかと思う。

　また、今、脱プラスチックの流れが非常に強くなってきていて、キャプションや展示パネルにスチレンボードのハレパネを主要に使ってきたが、これからはなるべくそれを削減しようという流れが全国的に進んでいる。美術館として、今後展示の方法の中でハレパネから何らかのかたちで改善を行っていくようなことを検討しているか。

事 務 局：具体的な検討はないが、課題としては認識している。キャプションを差し替え可能なタイプに変更するには初期費用がかかるので、どの時点でやるのか見定めたい。

委　　員：美術館合同でそういった研究はされているのか、博物館では色々試してはいるが、耐久性の問題でなかなかいい素材が見つからないという課題がある。この辺りは美術館の方が先行しているのではないかと思うので、是非、その辺りも実験的にやってもらいたい。

委　　員：ミュージアムコンシェルジュと言う方が美術館におられる。展示室で一番、来館者と直接、接している方で、かつ美術鑑賞に関して、色々工夫されている方だと思うが、どのような雇用形態なのか、給料がちゃんと上がって行っているのか。なかで働いている人が働きやすい環境をつくるということが、昨年度にヨーロッパで開催された国際博物館会合の中でも、2004 年に定められている博物館専門職員の倫理綱領のなかでもそういう項目があって、学芸員だけでなく、事務職員、警備員や解説員など色々な方が働きやすい環境をつくるということが、課題として色々な場面で提起されているが、この美術館のコンシェルジュはどういった形で任用されていて、改善に向けた取組や課題について、検討はされているのか。

事 務 局：当館にミュージアムコンシェルジュという職種の者はいない。

委　　員：展示解説員が職名なのか

事 務 局：展示に関わることは学芸課の３人の学芸員のみである。受付や監視をし、１年毎に任用されている非常勤職員については、本来、今の話しの様な役割はない。

委　　員：展示室にいる方は、監視員として、作品の保護を目的に目配りをする職員であり、お客様が監視員の方に質問をしたり、監視員から作品の見方などをお伝えするのは、本来業務ではないということか。

事 務 局：本来業務ではないが、その都度、展覧会前に非常勤の職員も含めて作品の紹介やお客様から基本的なことを聞かれたら、対応できる程度のレクチャーをしている。こちらから積極的にということではなく、あくまでもお客様から聞かれたことに対して対応するというのが、本来の職務となっている。

委　　員：現在、東京の上野の森美術館等でも行われているが、従来、作品の監視のために展示室に配置されている職員が、実際には現場で一番作品や来館者の方とも向き合っている時間が長いので、具体的で長期的な研修を行い、そういった意味でのプロフェッショナルスタッフにしていくと行った流れが、道立の場合はそのような位置づけではないという

ことだが、全国的にはある。美術館のようなところは、静かに個々の人が思い思いに作品を鑑賞するのが、基本的なスタイルだと思うが、これから先の美術館の整備ということを考えると、そういう本質的な役割を持った職員がいるのが望ましいと考えるので、そういった観点からも現場の職員の養成も検討していただきたい。

事 務 局：そういったことに携わる職員がいた方がいいと考えるが、制度的なこともあるので、先ほどのハレパネの件なども含め、今後、全道的な議論の中でそのようなことも話題にしていきたい。

委　　員：先ほどの意見に関連して、ＳＮＳ上に「道立帯広美術館ミュージアムコンシェルジュ」を名乗るアカウントが存在しており、帯広美術館の関係者と認識していたが、先ほどの事務局の説明によると任意の方ということか。

事 務 局：その者は当館の非常勤職員の一人である。ミュージアムコンシェルジュという職はないが、本人が自分の意思で書いていると認識している。

委　　員：広報とＳＮＳは切っても切れない。技術的には、基本的にどこからアクセスされたのかの分析は可能である。具体的にはパンフレット等のＱＲコードから同じアドレスに行くにしても、どのＱＲコードからアクセスされたのかタグをつけることができる、私どもの方ではテレビの画面に出すＱＲコードと新聞広告に出すＱＲコード、雑誌に出すＱＲコードをすべて変えている。それにより、どのＱＲコードからアクセスされたのか分析し、このようなコンテンツに興味のある人は、どのような媒体を見るのかという分析をすでに行っており、技術的には可能である。道のホームページでもそのようなことが可能かどうかは分からないが、今後、美術館に足が向いていない方にいかに興味を持っていただくかという、開拓をすることが大切と考えられるので、そのような分析もしていただきたい。また、ホームページの閲覧数は、カウントはしやすいが、一人が何回も見てもカウントされてしまうので、我々は閲覧数ではなく、ユニークブラウザ（ユーザーの数）により管理している。同じＩＰアドレスからのアクセスは何百回あっても１回としかカウントしない集計方法があり、その方が現実的にどれくらいの人がアクセスしているのかリアルに分かるので、このような分析も取り入れた方が、広報の伝わり方が把握できるので、参考にしてほしい。

委　　員：私はどちらかというと歴史系が専門だが、美術にも深く関連していて、短大で担当している資格課程も社会教育主事課程なので、美術、芸術文化に関連することを学生に教えており、博物館、公民館や図書館の話をしたりして、反応を見たりしているが、博物館は一番なじみがなくて、まわりから、どうしても美術館と博物館は高校生ぐらいからなかなか利用が上がらないというのは前から聞いている。美術館といっても昔の絵画だけでなく、現代アートは若い世代にすごく受けがいいという感じがしていて、三笠の方でよく、現代アートの企画、展覧会をしている。こういう新しい観点で、展示、企画をするとまた、若い世代の客層の取り込みができるのではないかと思う。

委　　員：私は以前、信用金庫で働いており、長い間広報の係におり、毎年苦しんでいたカレンダーに 10 年くらいお付き合いし、沢山の絵の先生方とお付き合いしましたが、あのカレンダー達はどうしたのだろうといつも気になっていた。以前、自分の会社に行く

と、一生懸命描いていただいた今までの古いカレンダーの原画が、山となって積まれているのを見て、ものすごく寂しくなり、係の人に聞いたところ、もう美術館に引き取ってもらったものもあるという話を聞いてほっとはしているが、そういう帯広の画家の方々の絵についていつも気になり、何年か前に先生と話したときにも、「それは美術館の方でもちゃんと考えているから大丈夫だよと、後は、どうやって保管するかだけの話だね。」と話もしたこともあるのですが、どちらにしてもそういう地元の絵を吸い上げられるシステムみたいなものがあるといいと思ったので、確かに北海道の美術館であるが、帯広市にある美術館として、地元の作家の絵に対して、どのような対応をとられているのかをお聞きしたい。

事 務 局：帯広美術館では道東の美術の収集は、活動のテーマであり、地域で活動されている作家の方々のことを研究し、それを展覧会あるいは教育普及事業で展開していくことが一つの使命となっている。そのような地域の機関に作品が保管されているという貴重な情報をいただいたので、可能であれば調査させていただきたい。ちなみにそのカレンダーの原画になった作品以外にもコレクションはあるのか。

委　　員：カレンダーになっていないような作品もある。ただそういうものが積んだあるところを見ると寂しい。地元の作家が一生懸命描いてくれた。こちらは道の管轄ですから、十勝管内で描かれた絵というのは、関係ないかもしれないけど、それを管理していた側としては、美術館でなんとかという気がしたので、そういうことは可能なのか、聞いてみたかった。

事 務 局：収集できるかどうかは、調査してみないとなんとも言えないが、そういう機会をいただけるのであれば、是非見せていただきたい。

委　　員：もし、帯広単独でできればよいが、予算を伴うようなことになれば、そのようなことにはならないかもしれないので、北海道にある美術館全体で協議するような場面があれば、そういった機会で意見を述べていただきたいと思った。

委　　員：以前の協議会で、この美術館の改修の話があったと思うが、計画的に進んでいるのか。

事 務 局：実は今日も、当美術館のある部分で雨漏りがあった。３２年目で古い建物となっていることから、屋上、外壁等も含め、全体の防水について、道の建設部が今年度実施設計、来年度改修を行うという計画で現在進んでいる。大々的に改修に伴っての臨時休館というところまでは行かない工事と考えている。